2020年2月16日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　**「十二部族・十二使徒・主の民」**

聖書箇所：民数記1:1-16

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日は民数記のイスラエルの十二部族の記述からメッセージを得たい、と願っています。そもそも民数記というのは出エジプトの民が荒野を放浪し、カナンの地に入る直前までの事柄を記した文書です。イスラエルの民は、苦難にあうと、「こんなことになるくらいだったら、エジプトの方がよかった」といってモーセやアロンをしばしば困らせました。そのたびごとに、モーセ、アロンは神に執成しをして神の赦しを得つつ旅を進めました。その民の不従順の罪のため、40年の荒野での生活をよぎなくされ、アロンはその途上で死に、モーセはカナンの地を目にするだけで死ぬ、ということになります。民数記はイスラエルの罪と贖いと赦し、の繰り返しのなかで神の忍耐と愛が示された文書といえます。しかし、これは裏返して言えば選ばれた民イスラエルが純粋なヤハウェ信仰共同体として形成されていくことが首尾よく進まなかった、ということも示しています。それは、イスラエルの罪が深まりを見せていく過程である、とも言えます。民数記は王国の滅びという裁きに至る出発点である、という言い方もできます。

　先ほどお読みいただいた箇所は民数記の最初であり、イスラエルの人口調査をせよ、との神の言葉がモーセに臨み、部族ごとに人口調査をするためのモーセの助手が指名されている箇所です。のちに、カナンの地に入る直前に人口調査がもう一回行われますので、この最初の方は第一回人口調査、後の方は第二回人口調査と言います。どちらも、人口調査をするのは軍隊を形成するためです。カナンの地や周辺の異民族との闘いの準備のためです。ちなみに、ルカ福音書2:1で皇帝アウグストスから住民登録の命令が出た、と言われており、これも人口調査ですが、このローマからの命令による人口調査は税金徴収が主目的です。民数記での第一回人口調査の記事では、イスラエルの十二部族は、ルベン、シメオン、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフの子エフライム、ヨセフの子マナセ、ベニヤミン、ダン、アシェル、ガド、ナフタリの十二族長があげられています。これら部族の助手とその部族の人数について記述されています。

　そもそも、このイスラエルの十二部族というのはアブラハム、イサク、ヤコブの「ヤコブ」の子どもとして聖書に名を挙げられている十二人から来ています。創世記35:22以下のその子供が列挙されています。これとの比較で第一回人口調査での記述をみますと、若干相違しています。まず、ヨセフはヨセフ自身のなではなく、その子エフライム、マナセの2名の名によって数えられています。これは、ヨセフはヤコブの子でも特別ですので、その子が、ヤコブの息子と同様に扱われることが認められているからです。創世記48:5でヤコブが「今、私がエジプトに来る前に、エジプトの地で生まれたあなたのふたりの子は、私の子となる。エフライムとマナセはルベンやシメオンと同じように私の子にする。」と言っています。ヨセフはヤコブの家族を救った人物だからです。もう一点は第一回人口調査ではレビが入っていない、ことです。レビ族はアロン、モーセの部族であり、神への祭儀を執り行う特別な部族とされました。従って、軍事的義務を免除されていました。また部族ごとに割り当てられた嗣業地も与えられず、その代わり、各部族の地にレビ族の町が設けられ、祭儀を行い、収穫物の1/10を得る権利が与えられてました。要するにレビ族は宗教的祭儀のための部族として特別扱いされたということです。ヨセフに代え、その子のエフライム、マナセを数え、レビ族をはずしましたから、やはり十二部族ということになります。それぞれの部族の人数があげられており、総数は603,550人とされています。人数の多い順にユダ、ダン、シメオンです。ヨセフ2部族を足してもユダ族にかないません。最小はヨセフ２部族をのぞきベニヤミンです。ベニヤミンはヤコブの末っ子です。ヤコブに溺愛された子です。

　民数記で次に十二部族があげられているのは2章で軍団の配置を定めている箇所です。会見の幕屋を囲んで三部族づつを東西南北に配置されています。グループのリーダー的部族はユダ、ルベン、エフライム、ダンです。ユダ族は最強の軍隊を有する部族です。ルベンはヤコブの実の長子です。創世記49:3-4で父の寝床を汚したということで長子の特権ははく奪されていますが、軍団の人数はまだ大きいです。エフライムはヨセフ2族のひとつで、後のサマリヤ地域を嗣業地とし、北王国の中心的部族になりました。ダン族は創世記でへび、まむしに譬えられよく言われていません。のちに士師記18:30、第一列王記12:29で偶像礼拝の責めを帰せられ聖書記者から批判されていますが、軍事的にはユダにつぐ勢力を持っていました。これらの部族の族長とされた人物は先にモーセの助け人とされた人々です。

　次に十二部族の名が列挙されているのは7章で幕屋を立て終わって、主にささげ物をする場面です。ユダ族が最初です。各部族が「穀物のささげ物」「全焼のいけにえ」「罪のためのいけにえ」「和解のいけにえ」の四種を携えてきています。レビ記で定められた奉献物です。これを行った部族はヨセフの2部族はそれぞれ単独で行い、レビ族はその祭儀の奉仕を行う義務あり、他の部族のようなささげ物は免除されています。ささげ物の中身をみますとレビ記で定められたささげ物の内それぞれの最上級のものを奉げています。また十二の部族が全く平等に、同じ量を奉げています。これは主ヤハウェの前でイスラエルの十二部族は同資格であることを示しています。これを突き詰めて、個人のレベルに引き直して見れば、イスラエルの民に上下はない、ということを意味します。王、大祭司、預言者のような立場にある人間か、どの部族に属するか、とかいうことは主の前には無関係だということになります。レビ記では指導的な立場にある場合は一般の人間より大きなささげ物を求められていますし、経済的に無理な場合はより安価なささげ物も許容されています。民数記の十二部族は祭儀においては完全平等を求められています。

　次は10章のシナイの荒野を出て旅立ち、パランの荒野にとどまった時です。ユダ族が最初であり、その出立の順序はささげ物を奉げた順序と同じです。リーダーもささげ物の時のリーダーと同じです。シナイの荒野と言われているのはシナイ半島の南端のシナイ山の近辺でしょう。パランの荒野はその北の現在はエジプトの一部です。その北端がカデシュ・バルネアです。カナンの地に向かって北上したということです。イスラエルのシナイ到着が第一年目の三月の新月、幕屋完成が第二年の一月一日、人口調査は第二年目の二月一日で、この出立は二月二十日ということで、幕屋完成からはあわただしい時間でした。ユダ族グループの三部族のあと、レビ族の一部が幕屋を運び、ルベングループの三部族のあとに、レビ族の他の一部が幕屋の聖なるものを運んだ、とされています。

　そして13章でもめごとが起きます。これから入ろうとするカナンの地へ斥候を派遣したところ、12人中10人が怖気図いてカナンの地に入ることに反対したのです。この時斥候で行ったイスラエルのかしらは今までの族長扱いされていた人間とはちがいます。若いけれども一族の中では注目されていたリーダー的存在であったと想像されます。この中に、ユダ族のカレブ、エフライム族のホセアが入っていました。このホセアがヨシュアと名付けられます。ホセアは「主は救い」の意味の「ヨシュア」の短縮形です。このギリシャ語形が「イエス」です。そして、ヨシュアはイスラエルの民をモーセに代わりカナンの地に導くリーダーになります。ヨシュア記のヨシュアです。カレブは「犬」の意味の言葉ですが、彼も、ヨシュアとともに神に信頼しカナンの地に入るように主張した人物です。結局、大勢がカナン侵入に反対であったため、神はこれを「主なる神への不信」として断罪し、その後、38年の荒野での放浪の旅を命ずることになります。最初の2年間を足すと「荒野の四十年」ということになります。しかし、この二人は38年後、いよいよ、カナンの地に入ると言う時にまだ生きて、カナン侵入のリーダーとしてこの軍事行動に参加することが許されます。カレブはヘブロンの地を与えられ、娘を兄弟オテニエルに嫁がせ、後の最初の士師の義父ともなりました。10人の斥候の反対理由は、「カナンの地は乳と蜜の流れる地だがそこの民アナク人は背が高く、強すぎる」ということでした。神の言葉は「疫病で彼らを滅ぼす」というものでしたが、モーセは執成しをして、四十年の放浪のみで赦してもらうのです。しかしその責めはモーセが負うことになります。

　イスラエル十二部族の名が列挙される箇所はしばらくなくなりますが26章に入って、再度軍を整えるために第二回人口調査をしたことが記されています。カナンの地に入る時期が近づいた、ということでしょう。記述の順序は第一回の時と基本的には同じですがヨセフ2部族の順序が入れ替わっているだけです。第一回では、エフライムの勢力がマナセを上回っていたのが第二回では逆転しマナセの方が多くなっているからでしょうか。第二回の多い順にユダ、ダン、イッサカルで最小はベニヤミンからシメオンに代わっています。シメオンは第一回の時、人数は第三位でしたが第二回では最下位になっています。創世紀49:7で「のろわれよ」と言われているところからみて、イスラエルの伝統ではあまりよく思われていない部族だったようです。またシメオンの嗣業地はユダの南でしたし、その中心の町ペエルシェバはユダヤ人の援助によって存続を保っていたようです。そのため、シメオンはユダ族に吸収され、小部族となっていった、と考えられます。南王国ユダが成立する頃には完全にユダ族の一部と考えられるようになっていた、と推測されます。ユダ王国はユダとベニヤミンと言われますがその時のユダ族にはシメオン族を含んでいる、と考えるべきです。

　民数記において最後に十二部族が列挙されているのは34:16以降の相続地の部族別決定のところです。嗣業地の割振りです。パランの荒野の北のツインの荒野での出来事です。ここが嗣業地の南端になります。嗣業地の北のはてはハツァル・エナンです。これはダマスコの更に北120キロにある町で、イスラエルの土地になったためしもありません。現代的感覚からすればまるで勝手な線の弾き方で、「とらぬ狸の皮算用」です。ここでの特徴はマナセが二つにされ半マナセと表現されていることです。マナセはヨルダン川の東と西に嗣業地がありましたが、これを半マナセとして二つにした、ということです。その結果、十三部族になります。土地を得なかったレビ族を加えると14部族ということになります。エフライム族のヨシュアは全体のリーダーとなりユダ族の斥候であったカレブはここでもユダ族の代表者となります。

このあと、十二部族が列挙されるのは申命記で2個所、エゼキエル書で1か所です。エゼキエル書では48章で嗣業地の割り当ての部分がありますが民数記34章の繰り返しです。レビの地域について詳しく記されており、最後に、町にはイスラエル十二部族の名を冠した門を立てるように命じています。具体的にはエルサレムについてです。そして新約に入って黙示録に一か所あります。7章です。これはいける神の「しるし」をつけられた人々の記述です。12部族から12千人づつで合計144千人です。そしてこれらの人々は白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御坐と小羊との前に立っていた、とあります。救いの時における賛美者達の幻です。これは新しきイスラエルが終末の日に呼び集められる、という幻でしょう。ここではレビ族が入れられ、ガド族が外されています。原因はいろいろ推測されていますが、士師記、列王記で「偶像崇拝者」とされている結果なのではないか、と思われます。

以上、さっと十二部族名が列挙されているところについてみてみました。民数記の各箇所を見てみると、これは主なる神がイスラエルを主ヤハウェの民とし選び、守り、育て、祝し、試み、そして救いの地に送るというプロセスを指し示していることがわかります。①第一回人口調査、これは主の民の選びです。②会見の幕屋での宿営は主の民の集団形成です。③祭壇奉献のささげ物は食事を共にし、主を讃える祭儀です。④カナンをめざしシナイを出立し、パランに行ったのは、救いの約束成就のために旅にでることです。⑤カナンの地の探索は主の民を派遣して様子をみることです。⑥第二回人口調査は、本格的働きの前の最終的準備です。⑦相続地を族長たちに割り当てるのは救いの地への宣教開始です。このようにみると、これは新約聖書での十二使徒に関する叙述と符合してきます。①主の民の選びは十二弟子の選びです。マタイ10:1「イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやすためであった。」とあります。②主の民の集団形成は山上の説教の箇所が適当と思います。マタイ5:1「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。」とあります。山上の説教は直接的には弟子に語った言葉です。③主を讃える祭儀の部分は5000人の給食、4000人の給食の部分が対応します。弟子たちはこの奇跡により主イエスの救いの意味を少し理解し、神を讃える時を過ごしたのです。5000人給食の箇所はマタイ14:19です。「そしてイエスは、群衆に命じて草の上にすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。」とあります。④シナイ出立に示される救いの旅へ出発は主イエスの一行が故郷のガリラヤを出て、エルサレムに向かう旅立ちが対応します。ルカ9:51-52「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町に入り、イエスのために準備した。」とありますが、苦難が待ち構えている雰囲気です。⑤カナンの地への探索は「70人の派遣と帰還」が対応するでしょう。ルカ10:1で「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。」と言われており、その際、「さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。」とおっしゃっています。容易ならざる地へ弟子を送ったのです。そして苦難の時が訪れます。主イエスの十字架です。イスラエル十二部族では荒野の40年です。そして、救いの地に入る時がまじかです。⑥その準備である第二回人口調査はあえて比較すれば「復活と弟子」の場面に対応するでしょう。ルカ24:33-34には「すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現された」と言っていた。」とあります。救いの福音を述べ伝える出発点に立ったのです。⑦そして最後の相続地の割振りは主の恵みの分かち合いですから、聖霊の分かち合いに対応します。ペンテコステとペテロの説教がそれです。使徒の働き2:1-4「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。」とあります。

このステップを一言づつで表しますと、①主の民の選び、②主の民の集まり（教会）、③主の愛餐、④救いを求めての旅、⑤チャレンジの時、⑥洗礼により主を受け入れ、⑦証の生活と宣教、ということになります。これは即ち、私たちキリスト者が主イエスの証人としての人生を歩むことになるまでの歩みにほかなりません。主イエスの選びと導きの背後には主なる神のイスラエル十二部族への選びと導きがある、ということを意味します。私たち一人一人の救いの道がイスラエルの民、主イエスの弟子の救いの道をなぞった物だと言うことです。これもほとんど奇跡ともいうべきことでしょう。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のひと時を感謝申し上げます。今日は、民数記を投資主の民への導きを見ることができました。それは新約における主イエスによる十二弟子に対する導きでもあり、私たちの教会、そして一人一人に対する導きでもあります。主の恵みにより生きる我々に、強い信仰と、述べ伝える勇気をお与えください。主イエス・キリストの御名により祈ります。アーメン）